

2022年7月1日

アジア研究図書館

退任のご挨拶（城山 智子）	1
アジア研究図書館短信	2
連載 奇著・好著 — “書痴学” の勧め 第5回 白衣派ジャイナ教戒律文献の海（河崎 豊）	3
アジア研究図書館利用案内	
次号の予定	
編集後記	

編集・発行：東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門
(RASARL)

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当

asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

退任のご挨拶

城山 智子

(経済学研究科)

2022年6月30日をもちまして、アジア研究図書館館長の職を、退かせて頂きました。コロナ禍で一年間延期されておりました、サバティカル・在外研究の為、8月から渡米することになっております。

アジア研究図書館の重要なミッションの一つは、創設以来百年以上にわたって、東京大学に在籍した教員・研究者が、集めてきたアジアに関する文献を、地域の現状を理解し、展望する研究・教育リソースとして再構築し、系統的コレクションとして発展させていくことにあります。実際、アジア研究図書館に集められつつある文献は、地域の自然環境や歴史文化の多様性を反映して、きわめて多岐にわたります。それらをコレクションとして構築していくにあたって、アジア研究図書館の教員・研究員の皆さんは、現地の言語を解し、社会文化に深い造詣を有する方々ばかりです。異なる言語的・文化的背景を有するメンバーが、知見を共有しながら、同じ目的に向かって協働するのは、アジア地域社会を映した小宇宙のようでもあり、大変刺激的な経験でした。

アジア研究図書館に各部局から移管される資料の多さには、処理しなければならない情報量を考えると、圧倒される感覚も覚えます。同時に、東京大学という研究・教育機関に、「アジア」というキーワードを入

れて検索したとして、ヒットするであろうアイテムや関係者の多さは、まさに、アジア研究図書館が持つアウトリーチの可能性に他なりません。そうした「研究する図書館」としてのアジア研究図書館のポテンシャルについては、今年三月に、学内の人文社会科学に關係する新たな教育・研究組織からなる、人文社会科学系組織連絡会議主催の共同シンポジウム「人文社会科学の構想力」でも、ご報告したところです。今後とも、アジア研究図書館が、学内の研究・教育のハブとして、大きく発展していくことを祈念いたします。特に、2021年10月の開館後も、コロナ禍による活動制限の為、お迎えできなかった、学内外からの閲覧者の方に、図書館が提供する資料とサービスを、十分に活用して頂ければ幸いです。

館長の職は離れますが、今後とも、アジア関係の教員・研究者として、異なった立場から、アジア研究図書館に貢献できればと考えております。在外研究中、この間の経験を踏まえて、欧米のアジア図書館についての見聞を深めることを、その第一歩とする所存です。

最後になりますが、ニューズレターの誌面をお借りして、在任期間中お力添えを頂いた、学内外の関係者の皆様、図書館の利用者の方々に、厚く御礼を申し上げます。

アジア研究図書館短信

教員の異動について

附属図書館は、令和三年四月一日よりアジア研究図書館研究開発部門 (RASARL) を設置し、三名の教員がアジア研究図書館の運営に携わってまいりましたが、そのメンバーのひとりで助教を務めていた鈴木舞氏が令和四年三月三十一日付で退職し、同年四月一日付で山口大学人文学部人文社会学科歴史学コースの専任講師に着任しました。これをうけ、東京大学社会学研究所に所属していた河野正氏を、四月一日付で新たに助教として迎えました。

新たなる体制のもと、世界最高の教育研究を支える環境整備に向け、引き続きアジア研究図書館の運営に全力を尽くしてまいります。

新任教員紹介

助教 河野 正 (このの ただし)

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了、博士 (文学)。専門は現代中国社会史。主要業績に『タバコ産業の政治経済学—世界的展開と中国の現状』(共著、昭和堂、2021)、「河北省における互助組・農業生産合作社組織過程の諸問題—等価・相互利益および遊休労働力を中心に」『歴史学研究』999 (2020)。

2022年3月31日までの配架状況

2022年3月31日までのアジア研究図書館の配架状況をお知らせします。

地域分類別 (含・大型本)		配架冊数
1	アジア (含・東洋文庫)	2,707
2	東アジア	13,629
3	東南アジア	4,465
4	南アジア	6,618
5	中央ユーラシア	2,620
6	西アジア	6,739
TRCCS	台湾漢学リソースセンター叢書	726
R1	参考図書 (ア)	30
R2	参考図書 (東)	394
R3	参考図書 (東南)	190
R4	参考図書 (南)	283
R5	参考図書 (中央)	155
R6	参考図書 (西)	214
	計	38,770

*分類法はこちらをご覧ください：

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/material>

連載 奇書・好著 — “書痴学” の勧め — 第5回

白衣派ジャイナ教戒律文献の海

河崎 豊

(附属図書館アジア研究図書館研究開発部門)

「奇書・好著」というからには、何か珍しく、またはふしぎで、かつ一読に値する書物を紹介するべきであろう。しかし、そもそも筆者の専門とするジャイナ教自体、ほとんどの日本人には珍しく、ふしぎな存在ではないか？また筆者からすれば、二五〇〇年以上にわたりジャイナ教徒たちが積み重ねてきた文献は、いずれも一読に値する好著である。とはいえこのような縛りでは際限がないため、ここはアジア研究図書館が所蔵する数少ない¹ジャイナ教資料、就中戒律文献を取り上げたい。ジャイナ教とは？という話から始めるとゴールを見失うため、今回は省略する²。

ここで戒律文献というのは、ジャイナ教の二大分派のうち、白衣派 (Śvetāmbara) が伝承した聖典中、チェーヤスッタという範疇に含まれる諸経典とその注釈群を指す。チェーヤスッタは僧尼の生活と教団運営に関わる諸規則を定めたもので...と書くと、仏教の律に対応すると思われがちで、筆者もしばしばそう説明するが、律が戒律条文（いわゆる戒経）と、その条文が制定された由来や適用範囲に関する解釈（いわゆる経分別）で構成されるのに対し、チェーヤスッタはほぼ一貫して簡潔な条文だけを

つ点が大きく異なる。これは、各条文がどのような理由で制定され、また実社会の多様な事例においてどう適用されたのかわかることが、チェーヤスッタを読むだけではほぼ不可能なことを意味する。

経分別の役割は、各チェーヤスッタに対して著された諸注釈が担う。時代や地域などに応じ変化する諸事例に対し、ジャイナ教はチェーヤスッタの条文改変や追加はせず、条文の拡大解釈や別規定の言外の読み込みといった手法で対応した。それらの解釈や口碑を集成した注釈文献群があり、その最古のものはニツジュッティ、ニツジュッティを踏まえ更に詳説したものはバーサと総称される。ニツジュッティの成立年代は不明といわざるを得ないが、バーサは六世紀頃から出てきたであろう。チェーヤスッタと諸注釈には少なくとも数百年の差が存在し、条文が制定された事情を諸注釈が正確に把握しているとは限らない。それでも、チェーヤスッタの理解に諸注釈の参照は必須であり、両者を一体のものにとらえ、綿密に文献学的な研究をすることは不可欠の作業である。

— と、こう強調することは簡単だが、そ

¹ 本学全体で見れば、ジャイナ教資料の所蔵点数は日本でも有数である。

² ジャイナ教の入門書としては、上田真啓『ジャイナ教とは何か 菜食・托鉢・断食の生命観』（風響社、2017）を推す。総合図書館では開架資料である（220.08:B64:49）。

れを執行するとなると、おいそれと手を出せないことであり、内外含めそのような研究は、実はまだ数えるほどしかない。

ひとつの問題は、その分量である。たとえばチェーヤスッタの『カッパ』、『ヴァヴァハーラ』、『ニシーハ』に対する各バーサはそれぞれ六四九〇、四六七五、六七〇四詩を持ち、それなりの覚悟をもってテーマとするに値しよう。

次に、ニッジユッティもバーサも、サンスクリットから派生した方言（プラークリット）の韻文で書かれ、それ自体も問題 — ジャイナ教徒が用いたプラークリット諸語の批判的辞典は未だ完結せず、言語研究も十分ではない — だが、それ以上に文体が厄介である。非常に多くの場合、暗記や要約のために項目を羅列するだけで、押韻は重視されても文法は頻繁に破綻し、内容把握は困難をきわめる。『ヴァヴァハーラ』のバーサ第七〇九詩を訳してみると……

naṃde bhoiya khaṇṇā ārakkhiya ghaḍaga geru
naladāme

muṃgagahaḍahaṇe ṭhavaṇā bhatte saputtasirā
ナンダに、在地領主、痛めつけられた。守衛官、結託、遊行者、シロアリの巣を焼く
ナラダーマに、就任、食事、息子の頭を伴う。

これを読んでその内容を理解できる者は、作者だけだと筆者は信じたい。この手の文体にあふれるニッジユッティ／バーサの正確な理解には、プラークリットまたはサンスクリット散文で著された長大な複注、複々注も読まねばならない。これも根気の要る仕事である。ちなみにマラヤギリという注釈家によると、上の第七〇九詩はマウ

リヤ朝の創始者チャンドラグプタとその宰相チャーナキヤをめぐる諸伝承中にある、以下の一逸話の鍵語を集めたものである（第七〇九詩にある語は太字にした上で下線を引いた）：

ナンダ〔朝〕が廃され、チャンドラグプタが王位に就けられた時、ナンダ側の**在地領主**たちはチャーナキヤによって**痛めつけられた**。

その後、彼らは半死半生でチャンドラグプタ配下の**守衛官**たちと**結託**し、押し込み強盗などで都城を襲った。別に任命された守衛官たちも〔在地領主と〕結託した。そこでチャーナキヤは、「結託せず、盗賊たちを根絶にするような盗賊取締官は得られるだろうか」と考えた。

その後、チャーナキヤは**遊行者**の装いをして都城の外を徘徊していたところ、機織り工房にいた**ナラダーマ**という織工を見かけた。織工ナラダーマの息子が休息していると、**シロアリ**が咬んだ。〔息子は〕泣き叫びながら父の傍に寄って「シロアリに咬まれた」と言うと、ナラダーマは「どこで咬まれたのか、見せなさい」と言った。息子がその場所を見せると、ナラダーマは**巣穴**からシロアリが出てくるのを見て、それらを殺した。それから巣穴を掘って、巣穴の中に卵があるのを見ると、その上に草を撒き、火をつけ、卵をも**焼きはらった**。

チャーナキヤが彼に「どうして〔巣穴を〕掘り返して、穴の内側に火をつけたのかね？」と尋ねると、ナラダーマは「この卵が孵ると、咬むことになるからですよ」と答えた。その時、チャーナキヤは《この者が盗賊取締官として〔任務を〕こなせば、シロア리를焼き尽くすように

盗賊たちを根絶させることができる》と考へた。その後、ナラダーマは盗賊取締官に**就任**した。

その後、ナンダ派に属する盗賊たちがナラダーマに近づき、「非常に多くの、盗賊の分け前を我々は与えましょう。保護してくださいませ」というと、ナラダーマは「そうしましょう」と言ひて、またこのようなことを言ひた —

「君たちは他の〔仲間〕たちも連れてきなさい。彼ら全員を納得させて、私の下に連れてくるとよろしい」

彼らは「承知しました」といひて〔そのように〕すると、ナラダーマは全員を丁重に扱ひた。

別の時、ナラダーマは盗賊たちのためにたっぷりの**食事**を用意した。息子たちと一緒に全員が来ると、〔ナラダーマは〕**息子たちもろとも**彼ら〔盗賊〕の**頭**を切斷した。

とはいへ以上の二点は、しよせん量の問題にすぎない。恐らく最も研究を阻害してきたことは、単純に「複注や複々注が手に入らなかつた」ではないかと思ひ。長らく、チャーヤスッタに対するニッジュッティやバーサの複注は、ニッジュッティ・バーサと共に一九〇〇年代初頭からなかばにかけてインド国内で出版されたきりであつた。しかも、何の写本に基づいたかもわからない、批判的校訂本とはいひがたいものが大半だつた。そしてそれらは日本の大学図書館にはほぼ所蔵されず、海外から大枚をはたいて複写を取り寄せるか、直接インドに出向くしなかつた。国内でチャーヤスッタとその注釈に関する研究が殆どなされなかつたのは、これが最大の要因だつたのではないか？ ちなみに実は欧米でも、一九六

〇年代以降はこの手の研究がパタリと止む。我が国とはまた別の事情があつたと想像するが、今は触れない。

この状況は、一九九〇年代以降劇的に改善していく。特に大きな出来事と筆者が考へるものとして以下の三点を挙げたい。まず『カッパ』に対するニッジュッティ・バーサがヴィレム・ボレによつて批判的に再校訂された ([1])。やや遅れて、『カッパ』に対するサンスクリット複注を伴うニッジュッティ・バーサが復刊された ([2])。更に二〇一〇年には、『ヴァヴァハーラ』に対するニッジュッティ・バーサが、サンスクリット複注を伴ひて、ムニチャンドラ師により再校訂された ([3])。これらが出版されたインパクトはジャイナ教戒律研究にとって計り知れない。[2]と[3]は、長らく東京大学では所蔵されていなかつたが、集書担当者（筆者ではない）の炯眼でアジア研究図書館に配備され、開架にある。

これらの出版のほかにも、ラドゥヌーンのジェイン・ヴィシュヴァ・バーラティー・インスティテュートは、複数写本に基づいてチャーヤスッタのニッジュッティ・バーサを再校訂し、ヒンディー語の訳と詳細な注記を添えて次々と出版したほか、長らく写本のまま放置されてきた『カッパ』に対する別の韻文・散文注が出版されるなど、資料の充実ぶりは目をみはるものがある。更には、現在に至るまでのあらゆるジャイナ教関連出版物を PDF 化し無償で公開する Jain eLibrary (<https://jainelibrary.org/>) の開始は、戒律研究のみならず、ジャイナ教研究そのものへの福音であつた。

我が国では、ムニチャンドラ師による出版に刺激された筆者を含む有志が断続的に

『ヴァヴァハーラ・バーサ』読書会を開催し、『ヴァヴァハーラ・バーサ』を資料とした論文も公表された。筆者はというと、『カップ』とそのバーサの研究を少しずつ進めているところである。

かくしてようやく、チェーヤスッタと注釈を、戒経と経分別のごとく一体のものとしてとらえ、綿密に研究する「夢」が実現可能となった今、ジャイナ教戒律研究の大海にこぎ出した我が身に迷いはない。迷いはないけれども、私は実は海ではなく底なしの沼にこぎ出してしまったのではという気が……。ちなみに現時点では、『ニシーハ』に対するバーサ研究が極めて手薄である。これにはプラークリットとサンスクリットの混交体で書かれた副注しか出版されておらず、また私見では副注の校訂があまりよろしくない。真面目に取り組もうとすれば副注の再校訂からする必要があり、大仕事である。筆者がこれに手をつけると来世以降に持ち越すと思われる上に、今と同じ職業を来世も続ける確証もないので、若く有能な研究者の挑戦を期待する。

最後に、ジャイナ教戒律研究を進める上での必読書をあげよう。これもアジア研究図書館が所蔵する：

Shantaram Bhalchandra Deo, *History of Jaina Monachism from Inscriptions and Literature*. Deccan College dissertation series 17. Poona: Deccan College, 1956.

総合図・4Fアジア 4-01W:168c:deo

ぜひ手に取って、ジャイナ教戒律研究の豊かさを感じていただければと願う。

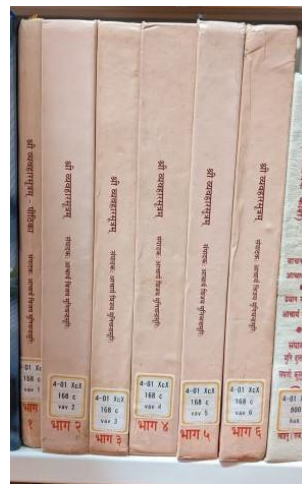
[1] Willem B. Bollée, *Bhadrabāhu Bṛhat-kalpaniryukti and Sanghadāsa Bṛhat-kalpa-bhāṣya*, 3 vols. Beiträge zur Südasienforschung Bd. 181. Stuttgart: F. Steiner, 1998.

文・印文 S:16208, 16209, 16210



[2] Caturvijaya and Puṇyavijaya (eds.), *Bṛhat Kalpasūtram*, 6 vols. Śrīātmananda-Jainagrantharatnamālā 82, 83, 84, 87, 88, 90. Ahamadābāda: Sarasvatī Pustak Bhaṃḍāra, 2002.

総合図・4Fアジア 4-01XcS:168c:bha1-6.



[3] Muniçandra (ed.), *Śrī Vyavahārasūtram*, 6 vols. Ā. Śrīomkārasūrijñānamamdira graṃthāvalī 46-51. Sūrata: Ācāryasrī Omkārasūrijñānamamdira, 2010.

総合図・4Fアジア 4-01XcX:168c:vav1-6.

アジア研究図書館利用案内

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide>

場 所	総合図書館4階
開館日／閉館日	総合図書館の開館日・閉館日に準じます。
開館日	以下閉館日を除くすべての日
閉館日	年末年始(12月28日～1月3日) 定例休館日(おおむね毎月第4木曜日) 夏季の一斉休業日(2日間) 試験等大学行事のための閉館日 その他臨時閉館日

開館時間

	曜日等	通常期	8月・3月
	月～金曜日	8:30～22:30	8:30～21:00
	土・日・祝日	9:00～19:00	9:00～17:00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/outside/gakugai>

次号の予定

第9号は令和四年十月一日に発行予定です。

ニューズレターへの情報提供、投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館 ([asia.lib\[at\]lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asia.lib[at]lib.u-tokyo.ac.jp))までお知らせ下さい。

編集後記

第8号をお届けします。

ようやく海外への往来も自由になりつつある今日このごろです。周囲でも夏は調査旅行に…という声を聞くようになりました。かくいう編者は、この2年間の生活のせいで生来の出不精マインドがいっそう強い輝きを放つようになってしまった上に、追い打ちをかける円安…まずは他府県に日帰り出向くあたりがリハビリでしょうか。(などと書いていたらまたもや東京の感染者数が増えました。迂闊に後記も書けぬ) (J)